

ライブラリアンの 高地トレーニング

写真・文 則竹理人
Rihito Noritake

—ボリビア・プログラム—



写真1 ロープウェイからラパスを見下ろす。エルアルトでは、ラパスのことをスペイン語で「下の街」と呼んでいた。

●アウェイの洗礼

三五八〇メートル。その数値をみて、私は改めて驚愕してしまった。二月某日の夜、頭痛で寝付けない私は、気を紛らわすためにスマートフォンをいじり始めた。便利な世のなか、現在の標高を即座に示してくれるアプリがあることを知り、興味本位でそれを入力した。その時の測定結果が、冒頭の数値である。

その時は、ボリビアの中心都市、ラパスのとあるホテルに泊まっていた。アンデス山脈に沿って位置するラパスは、「世界一高いところにある首都」といわれることもあるほど、標高の高い都市として知られている。私はその地にアジア経済研究所図書館の蔵書を充実させるために現地で刊行される図書や統計資料を収集することや、現地の図書館や文書館の状況を調査することをミッションとして送り込まれた。ラパスでの滞在期間は丸五日間。この間、終始自分との戦いを強いられることになるとは、入国時には思いもよらなかった。

チリのサンティアゴからペルーのリマで乗り継ぎ、土曜日の昼過ぎにラパスの隣接都市エルアルトの国際空港に到着した。このエルアルトは、前述したラパスよりもさらに標高の高い都市である。数値で表すと四〇〇〇メートル以上。ラパスの標高は、富士山の九合目に相当するが、エルアルトの場合、もう日本では例えることができない高さである。都市の名前自体が、スペイン語で「高地」を意味するのも納得である。ペルーのリマからエルアルトへの便には、偶然日本人団体が乗り合わせており、日本人を中

写真2 標高約 3,500m に立つ
ホテルの 5 階からの眺めだが、
さらに高所にも家屋が立ち並ん
でいることが分かる。下は同じ
地点から撮った夜景。



写真3 エルアルト空港に
ある酸素セラピー。



バゲッジである。手荷物受取場から人の数が徐々に減っていくなかで、空港職員らしき人を追いかけて「これ以上荷物は出てこないのか」と確認したり、後ほどホテルに届けてもらえるよう航空会社の職員と話して手続きを取ったりと、到着して早々大変な思いをしてしまった。とはいえ、少し息苦しい感覚があるだけで、特に体調面での問題はなく、無事「手ぶらで」ホテルに到着することができた。

しかし、地獄はその夜にやってきた。ひどい頭痛である。辛くて眠れず、インターネットで調べてみると、睡眠時は呼吸が昼間より少なくなるため、酸素不足が悪化することがあると分かった。幸いにも次の日は日曜日で、書店や図書館などは開いていないので、特に活動予定がなかったため、ホテルで安静にしていると昼過

心とした多くの外国人客とともにボリビアに入学した。とある日本人男性客は、飛行機から降りた後、近くにいても聞こえてくるほどの深呼吸をしながら歩いていた。とある日本人女性客は、「思ったよりも（高地の環境は）大丈夫だね」などと話していた。私も今日は無理しないで、ホテルでゆっくり休もうと考えていたが、出鼻をくじかれてしまった。ロスト



写真4 エルアルトのロープウェー駅。近くでは毎週木曜から日曜にかけて国内最大級の市場が開かれる。



写真6 分かりにくい、中央の亀裂の中に見える白いのが転落した自動車。



写真5 ロープウェーは最大6人ほど乗れる大きさで、スキー場のリフトのように次々とやってくる。

● 優しさと重さに挟まれて

ぎには完璧に良くなった。夜には現地在住の日本人の方と食事をするため外出したが、特に問題なく過すことができた。ちなみに、行方不明だった荷物はこの日の午前中に無事ホテルに届けられ、次の日からの活動を前にぎりぎりながら準備が整った。

月曜日は、ラパスの図書館とエルアルトの史料館を訪問し、調査を行った。ラパスからエルアルトへはタクシーで行ったが、帰りはラパスの事務所に戻る職員の方とともにロープウェーを使った。運賃は三ボリビアーノ(約五〇円)で、標高四〇〇メートル以上のエルアルトから三五〇メートルほどのラパスに下っていく路線である。途中、おそらく転落事故で自動車が山肌の隙間に挟まっている衝撃的な光景をみながら(写真6)、ラパス市街を上空から一望し、束の間の観光気分を味わうことができた。

だが、その夜再び頭痛に悩まされた。どうやら、私の体はラパスの標高三五〇メートルほどまでは適応できても、エルアルトのように四〇〇メートルを超える場所へ行くと影響が出てきてしまうようである。頭が痛いという、決まって現地の人から返される言葉が「コカ茶を飲め」である。コカインの原料でもあるコカの葉を煎じたお茶は、高山病に聞くといわれている。私の泊まったホテルを含め、ラパスの多くのホテルでは、客用にコカ茶を無償提供している(写真7)。もともと高地では水分を多く摂った方がいいということもあり、私は中毒に

2014年入所。図書館でラテンアメリカ
関連資料の収集を担当。

写真7 ホテルで無償提供されるコカ茶。
日本へ持って帰ることはできない。



写真8 ホテルのすぐ近くにはサッカースタジアムがあり、ちょうドラパスの2大クラブの
対戦が行われていて、大変賑わっていた。



写真9 アンデス名物、リヤマ肉料理。食べやすかった。

ならないかびくびくしながらも、コカ茶をがぶがぶ飲んだ。味はクセがなくおいしく感じたが、残念ながら頭痛はすぐ治まらなかった。

次の日は、もともと一施設のアポシが取れていなかったが、行く先々の職員の親切で、最終的には一日に五施設も訪問することができた。ボリビア人の優しさと、前日から続く頭痛と、入手した大量の本の重さを全身で受けとめながら、実り多い調査と資料収集を行うことができた。それにしても、空気が薄くて坂の多いラパスの街を、大荷物を抱えて息を切らしながら歩いていると、私は何をしにボリビアにやってきたのか一瞬分からなくなる。先に出した例えに

当てはめれば、大きなリュックを背負って富士山の頂を果敢に目指す登山家と変わりないことをやっているではないか。

● 苦難の先にあるもの

あつという間に最終日になり、それまでに集めた資料を研究所に発送すべく、三〇キロ近い荷物を持って発送業者の営業所に向かった。ホテルの前でタクシーを捕まえて行ったが、

営業所の前の道路が渋滞しており、どうしても営業所に近づけず離れた場所で降ろされてしまった。荷物を引きずるように数十メートルを歩いた時も、自分は何を目指しているのかという疑問がわいてしまったが、無事送ることができた後は達成感のあまり、ホテルまで一五分ほどかけて歩いて戻った。例によって動悸は激しく、息は切れてしまったが、そこに苦しさはなかった。長引く頭痛を乗り越えて、最終日にやってと高地の環境に順応したのであった。

次の日の早朝にエルアルトの空港に向かい、ボリビアをあとにした。エルアルトへ向かう際にラパスのホテルで手配してもらったタクシーの運転手は、運転中ずっと何かを口に含んでいた。匂いで分かったが、コカの葉を噛んでいたようである。あらかじめエルアルトに行くことが分かって、用意してきたのであろう。現地の人でさえそのような準備をしている所へ無防備で臨み、頭痛に打ち勝った自分を誇らしく感じた。

次の目的地はペルーのリマであったが、リマのふんだんな酸素に感動してしまった。「ボリビア・プログラム」を経て、心なしか体が丈夫になった気がしており、日本へ帰国した後もインフルエンザの流行をもとめせず、元気に過ごしている。この拙いエッセイを読んでいただき、ライブラリアンの「インドア」なイメージをより多くの人から払拭することができたことなら幸いである。